

句集

祭獅子

西岡
よう子

每日句会入選句

背ナに嬰負ひてどんどの火に祈る

母の背ナから児の手伸ぶどんどかな

悪しき夢幾度目覚めぬ虎落笛

雪しまく谷戸へ傾く電車かな

騒めきの去りし神苑寒に入る

窓の日に脹ら雀や美容院
深々と夕帳落つ枯木立
菩提寺の砦のごとき枯木立
コート脱ぎつつおしやべりす診療所
豪邸の松色変えぬ男ぶり

山門の仁王の脛に散もみぢ

紅葉茶屋日矢に錐揉む煙かな

草蝨払ひつつ待つ里のバス

秋拾形見の裾を繕ひぬ

はち切れんばかり袋の今年米

甘柿かはた渋柿か野路愉し

おちこちに糶焼く煙道の駅

稲を刈る背の藁屑で鎌を砥ぎ

道祖神へと畦たどる曼珠沙華

藁葺き家沈む棚田の彼岸花

里のカフェの芒隠れに案内板

空真澄機影一点秋高し

山壁の深きより霧たちのぼる

かなかなや摩耶天上寺下山道

ひたすらに草食む羊秋高し

天幕の裂けたるごとく雷鳴す

帰省子の干しもの竿のカラフルに

村祭屋台は婦人部総出てふ

観覧車持ち上げてをる雲の峰

青葉梟巢立ちしあとの大櫓

竹筒に錢いれて買ふまくわ瓜

隠沼に葉洩れ日躍る涼しさよ

舞殿を借りて句会や風涼し

遠ざかる電車に灼けし鐵路かな

胡瓜とるくの字への字も隔て無く

寝ねがての枕に激し虫時雨

イケメンの車夫なれど汗滂沱なる

松浜に憩へば処暑の風通ふ

湯上がりの宿下駄鳴らし庭涼し

電車みな片側に座す大西日

惚けたるゴーヤさながらカメレオン
本堂へ礎の片陰ひろひつつ
嘴の疵のこる完熟トマトかな
駈けまはる吾子を見守る日傘かな
朗々と吟ずテノール声涼し

はまなすや沖に巨船と漁り舟

麦秋の家並みはなべて能登瓦

テラスへと通ふ疎水の風涼し

楠大樹緑陰なせる宮門跡

薄暑かな出だし揃わぬ吹奏楽

序破急の潮騒のごと青嵐
かわらけの放物線や谷若葉
わき見して連とはぐれし街薄暑
叩かれて香りを放つ芽山椒
たんぽぽの黄なるなぞへに野良着干す

丁目石辿る道ゆき草若葉

総玻璃のカフエテラス打つ花吹雪

西行に見せたし花の五月山

大桜天蓋なせる殉職碑

櫛の齒の路地に迷ひぬ春時雨

おしげなく黒髪切つて卒業す
デッサンのモデル蛙の目借時
手庇しにミモザ見上げる空ま青
春潮に溺るるごときかくれ礁
蜆汁飲んで晩酌了とせん

水うらら幼の投げし石礫
ありがたや畳廊下の春火鉢
探梅といふは口実おしやべり行
野良猫の春の夢みるボンネット
罫線となる畝筋の雪間かな

伐られたる台場くぬぎに新芽ふく

春泥の轍ぐちやぐちや炭焼場

細枝に数珠なす春の雨雫

食べごろと湯豆腐躍りはじめけり

磴はいま万華のごとく紅葉敷く

点滴の犬を見守る夜長かな
入船の水脈煌めける秋の晴
接岸のフェリーにしづく秋の潮
白砂掃く禰宜の箒の爽やかに
聞き耳をたてて台風過ぐを待つ

短冊をはみ出す文字や星祭

湧水の疎水たばしる里の春

おちこちに野焼きの煙谷戸動く

豆腐屋のラツパの鳴りて路地日脚

シースルーエレベーターに風花す

青き踏むこともりハビリ通院す
掃除機のからと音すは年の豆
出囃子の三味の音もまた早春譜
春一番指名手配のポスターに
鄙とても落人の裔歌がるた

緞帳の色も華やぐ初芝居

弓始女師範も振袖に

淑気満つ千手を翳す大櫓

大晦日子らにも煮しめお裾分け

雪を搔く使い込まれし竹箒

長靴に泥付けし
まま大根売る

冬帽子おしやれに
被る好々爺

着ぶくれて巻き尾の
犬に急かれおり

黄落の並木の道を
ポストまで

山峡の橋桁仰ぐ
天高し

豆腐屋のラツパに声や路地の秋

弥陀堂を写して浄土池澄める

糠床にぎゅつと押し込む秋茄子

権禰宜の影忙しげや万灯会

秋風にポストのビラのはずれさう

鄙の庭草ひとつなし日照草

苦瓜のジュース蜂蜜ふんだんに

梅雨出水増しゆく嵩を恐れけり

凌霄のうち被さりし辻ミラー

剥くたびにきしきしと鳴く春キャベツ

水仙の香り愛でつつ活けにけり
柄杓もて割る蹲踞の薄氷
初句会花びら餅に舌鼓
行厨の足を投げ出す散紅葉
手をつなぎ子らスキップす園小春

重荷負ふ友の笑顔や石路の花
ふる里は落人の村ゆず熟るる
ロープウェイ粧ふ山を二夕分けす
降りやまぬ落葉なれども掃きにけり
手術前看護師の笑み温かし

峠道下校の子らに暮早し
枯蠟螂構えし鎌に力なし
猪害を託つ話題や村まつり
祭獅子猛る四囲より囃されて
春疾風ダム湖は尖る波の原

雪嶺にアイゼン立てて日の出待つ
辛口の酒を好みて目刺焼く
春の雪落ち行く谿の奈落かな
パドックの人気の馬の息白し
凍て水槽のぞきめだかを数へけり

機織女御用始の櫓がけ
黙々と交はす筆談風花す
県境のダム湖を駈けて寒波くる
濤白く月の断崖洗ひけり
帆を揚げしマストに絡む秋の風

露草や終着駅の車止め
無機質の機械の音や秋暑し
今日もまた病院通い花は葉に
参道の左右は著莪の花浄土
春潮の渦大接近船傾ぐ

花吹雪蕞の波に降り積もり

磴登る花の二の丸三の丸

唄ふごと風のコスモス句碑ひとり

秋遍路ドライブマップ頼みかな

長電話切るに切られず虫すだく

里山の風に屯す赤とんぼ
被災地を熱く語りし帰省の子
変身をするべく主婦のサングラス
帰省子の旅装解く間も話しかけ
無農薬てふこのあたり蝗飛ぶ

厨へと笥を走る山清水

実より葉の繁るも良しとゴーヤ棚

朝日さす葉裏返してトマト取る